



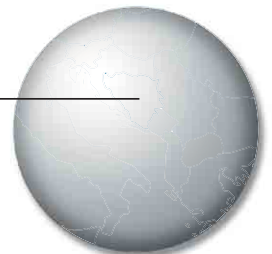
ボスニア・ヘルツェゴビナ版道の駅「エコクチャ」ではチーズやパスタ、手工芸品など地場産品を販売している。2004年11月22日に行われたエコクチャの開店式典には、100人以上の関係者やメディア、地元の人々が集まった

FIELD SKETCH

地域社会のきずなと平和を築くエコツーリズム

ムスリム、セルビア系住民、クロアチア系住民の3民族が凄惨な戦いを繰り広げたボスニア・ヘルツェゴビナ。内戦終結から12年が過ぎ、国土の復興は進んだものの、経済の再建は遅れ、人々の生活は厳しいままだ。また、国土は民族別にボスニア・ヘルツェゴビナ連邦（ムスリムとクロアチア系住民）とスルブスカ共和国（セルビア系住民）の2つのエンティティー（準国家的な統治機構）に分けられ、民族間の隔たりは今なお深い。そんな中、エコツーリズムを通じて地域を振興させる試みがJICAの支援で動き始めている。それは、同国の平和の定着、民族融和を目指す試みでもある。

ボスニア・ヘルツェゴビナ
BOSNIA AND HERZEGOVINA



観光資源を生かした地域振興

「ボスニア・ヘルツェゴビナって危くないの？」
日本でボスニア・ヘルツェゴビナに行く
と話す、そんな反応を示す人が少なくない。そのお隣クロアチアは、人気の観光リゾート地として最近、日本からも訪れる人が増えているが、ボスニア・ヘルツェゴビナに対しては、紛争が終結して10年以上がたつにもかかわらず、まだ危険なイメージをぬぐい切れない人が多いようだ。
しかし今、この国はヨーロッパの新しい

観光地として注目を集めている。紛争中に破壊され、2004年に再建されて世界遺産となったモスタルのスターリ・モスト（古い橋）や、今年世界遺産に登録されたばかりのヴェシエグラードのソコルル・メフメト・パシャ橋など、オスマン帝国時代の建造物をはじめ、東西文明の十字路として多様な民族、宗教、文化が混在し、独特の雰囲気醸し出している。また、豊かな水と緑に恵まれた美しい自然は、この国の最大の魅力と言っても過言ではないだろう。
近年、こうした資源をもっと生かして観光産業を育て、地域を振興させようという機運が高まりつつある。

多民族、多宗教が混在するボスニア・ヘルツェゴビナでは、1992年に旧ユーゴスラビアからの独立をめくり内戦が勃発、ムスリム、セルビア、クロアチア系住民の三つ巴の戦いが繰り広げられた。95年に Dayton 和平に合意し、国際社会の支援によってインフラの復旧や難民の帰還事業が進められ、戦争被害の復興は達成されつつある。しか



ヤイツェ市内の国道に面したエコクチャの看板。ヤイツェはプリバ地域の「ゲート」に当たる



エコクチャの隣に設置された観光情報センターに展示されているさまざまな手工芸品。センターではプリバ地域の観光案内やエコツーリズム活動の情報提供を行っている

（総合計画）を提案する「エコツーリズムと持続可能な地域づくりのための開発計画調査」を03～05年に実施。その中で、各地域の住民組織による農家民宿や地場産品販売所、歴史遺産遊歩道などの6つのパイロットプロジェクトを行った。
さらに、このマスタープランをもとに、行政と住民協働のエコツーリズムによる地域振興を進めるための人材育成と組織能力の強化を図る「エコツーリズムを中心とする持続可能な地域振興プロジェクト」を07年1月末に開始。セミナーやワークショップを開いて、エコツーリズムによる地域振興策の知識や技術を普及したり、行政と住民の協働体制づくり、エコツーリズムの各活動を担う人材の育成などに取り組んでいる。それらを支えているのは、総合観光開発計画を担当する総括の伊藤金雄さんをはじめ、組織・体制強化、観光プロモーション、観光マーケティング戦略、資金計画、歴史文化保全、自然環境保全、人材育成の分野で投入された8人の専門家たちだ。

スニア・ヘルツェゴビナ連邦に属するヤイツェ、スルブスカ共和国に属するイエゼロとシボボの3市からなる。森林とプリバ川の清流に恵まれたこの地域では、農家民宿事業、地場産品を販売する道の駅「エコクチャ」、河川・湖を活用したスポーツ・レクリエーションのパイロットプロジェクトが行われている。各プロジェクトは、プリバ民宿協会（株）エコクチャ、プリバスポーツ協会という新たに設立された地元団体が運営している。また、各団体をとりまとめ、それぞれの活動の調整役を担うのがエコプリバ協会だ。

し、旧体制から資本主義経済への移行、国民の大部分を雇用していた国営企業の民営化・再建が遅れており、帰還難民の生活再建もめどが立っていない。そのため、人々は職を求めて都市部に流入するだけでなく、経済難民となって再び国外に出て行く人も多い。経済復興の土台となる基幹産業の振興が急がれる中、新たな産業として有望視されているのが、豊富な自然資源や歴史・文化財などを活用したエコツーリズムだ。特に地域社会が主導的にエコツーリズム開発に取り組み中で、地元の農産物や特産品の販路を広げ、地場産品を振興させることによつて雇用を創出し、帰還民の定着や収入向上・生活改善につながることを期待されている。

そこで、同国の持続的な経済成長を支援するJICAは、2つのエンティティーにまたがる北部のプリバ地域と南部のベレス地域でエコツーリズム開発のマスタープラ

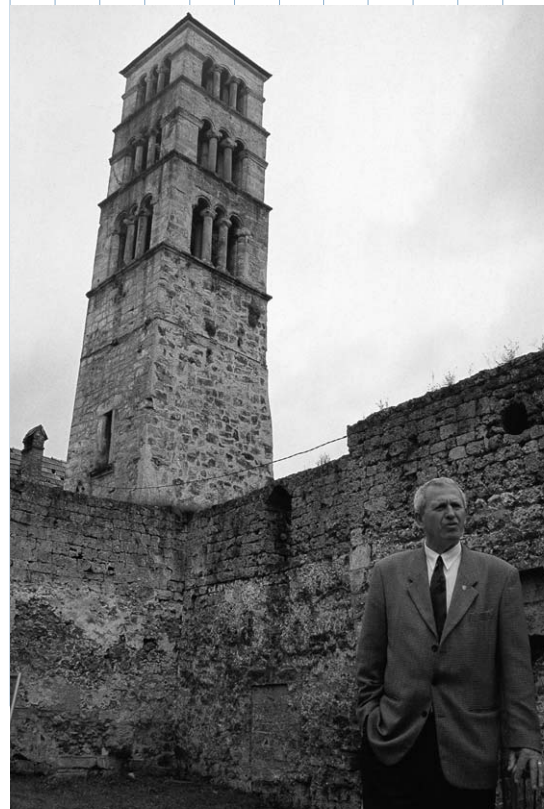
「中世の古都として知られるヤイツェには城址や砦など24もの歴史・文化遺産があり、戦

ヤイツェの名ガイド、ズリラ・ツブルツコさん。ヤイツェの歴史を紹介しながら、城砦を案内してくれる。歴史・文化遺産や中世古都の町並みがヤイツェの魅力の一つだが、それらの保護やガイドの育成が課題

するJICAは、2つのエンティティーにまたがる北部のプリバ地域と南部のベレス地域でエコツーリズム開発のマスタープラ

首都サラエボから北西に車で約3時間、北部のプロジェクトサイト、プリバ地域は、ボ

民族融和への願い





パイロットプロジェクトで農家民宿経営を始めたシボボのゴルデナツ・ネジョさん。プロジェクトでは10世帯を選定して什器備品整備や接客サービスのトレーニングなどを実施した。しかし10軒では、団体観光客の受け入れが難しいため、増やしていく計画だ

前は国内有数の観光地だった。もう一度観光地として再興させたい。その可能性は大きいにあるし、観光客も年々増えている。現在、市は城壁に囲まれた旧市街を世界遺産の候補に申請しているところだ」

そう話すのは、(株)エコクチャの代表ムーヨ・サディコビッチさん。日本の支援で建設されたエコクチャは、3市の中で最大の町ヤイツエの中心部にある。プリバ地域の農産物や酪農製品、手工芸品などの特産品を販売しているほか、観光客向けにさまざまな情報を提供している。ここで地場産品を委託販売

する契約農家は200軒以上あるそうだ。この地域の人々は旧ユーゴ時代、国営の工場などに雇用されていたが、戦後、その多くが失業し、小規模農業による自給自足の生活をしている。観光振興とともに地場産品の市場が拡大することで、そうした零細農家の収入向上が期待されている。

また、ヤイツエにはもともと3民族が共存していたが、戦後、セルビア系住民はシボボに移住した。伊藤さんは「民族間の対立感情は根強く、開発調査を始めた当初、各民族は水と油のように分かれ、それぞれが自分の町の振興だけを考えていた」と振り返る。しかし、人材も資源も限られている中で、プリバ地域の観光産業を育てるには、民族同士が協力し合わなければ成功しない。伊藤さんらは人々にそう訴え掛け、分断された民族間の協力関係の構築に努めた。その結果、民族合同のエコプリバ協会が設立され、協会が中心となって住民参加によるエコツーリズム活動を計画・実施してきた。

「皆、収入を向上し、生活を良くしたいという気持ちがある。それに、地元で産業ができれば、海外に出稼ぎに行っている家族や子どもが帰ってきて一緒に暮らすことができる」と期待している。人々は、そのためには民族が協力することが重要だと本当は分かっている。

もちろん、伊藤さんら専門家は、活動を支援するに当たり民族バランスへの配慮を怠らない。そうしなければ「根っこでくずぶつているものが表に出てくる」可能性があるからだ。伊藤さんらは、このプロジェクトを通して民族融和が促進されることを願っている。

成功のカギは郷土への愛と誇り

プロジェクトはまだ始まったばかりだが、



スポーツ活動のパイロットプロジェクトを実施するプリバスポーツ協会のアレクサンダー・デュキッチ会長。河川や湖を利用したスポーツ・レクリエーションは、プリバ地域の代表的なエコツーリズム活動であり、彼はその推進を担うキーパーソンの一人。「若者を含め、ガイドやスタッフの育成を急いでいる。今後はトレッキングなど山や森を利用した活動も充実させ、エコツーリズム活動をもっと多様化して釣り客だけでなく家族旅行客の市場へと拡大したい」

然として厳しいが、私たちの努力の成果が少しずつ表れている。例えば、ある女性は1頭の牛を飼ってチーズを作っていたが、量・質を上げるための技術支援を受けたところ、良質のチーズを販売できるようになって収入が向上し、さらに2頭の牛を買うことができた。

こうした成果を増やすことが、私たちの活動の目的の一つだ」と説明する。05年に日本でエコツーリズムに関する研修を受けたエコプリバ協会のサミール・アギツチ会長は「エコツーリズムやプロジェクト管理だけでなく、地域住民を巻き込み、意識・能力を向上する手法を学ぶことができ、とても有益だった。プロジェクトに参加したいと手を上げる住民が増えており、特に若い世代は語学力もあるし、観光の知識や技術を吸収する意欲が高いので、ガイドなどに育成したい」と意欲を見せる。

伊藤さんも「努力した人が成功するという事例を増やせば、ほかの人たちもその成功者を目指して頑張ろうとやる気が高まると思う。手工芸品などの土産物も、伝統技術を生かしながら売れるものにどう加工するかが課題だが、技術を上げれば展開が広がる可能性がある。ガイドのトレーニングも必要だ。歴史遺産保護の意識や技術がまだ低いので、保護・利用計画を立て、ステップを踏んで技術移転

していきたい」と意気込む。

また、川の清掃活動や、住民によるごみ拾いや花を植える活動など、地域の美化キャンペーンも実施する考えだ。「数年前より環境汚染が進んでいる。それではエコツーリズムはできない。住民に郷土への愛と誇りがなければこの試みは成功しないだろう。地元の人々のそうした思いに、外から来た観光客も共感し、リピーターになってくれる」(伊藤さん)。プロジェクトでは広報活動にも力を入れており、観光地としてだけでなく、エコツーリズムによる地域振興に取り組む町としても国内で知られつつある。活動に関心を示すほかの自治体から協力の要請も来ており、そうした地域にも普及していく予定だ。伊藤さんは「今後、競争相手が増える中で、市場で生き残る質の高いエコツーリズムを実現するには、3市が協力し、かつそれぞれが切磋琢磨していくことが重要」と強調する。

観光は「平和の産業」といわれるように、まず安全な地域であることが不可欠だ。同時に、観光産業が発展することで、地域の安定も促進される。民族が手を携えて幾多の困難を乗り越え、エコツーリズムによる地域振興が成功すれば、いつかこの国の「危険」なイメージは消え去り、世界各地から観光客が訪れる国になるに違いない。



プリバ川沿いのロッジでは日本の岩魚に近い魚の料理を味わうこともできる



3市を流れるプリバ川は、この地域のシンボル。フライフィッシングをはじめ、カヌーやカヤックなどのスポーツ・レクリエーションが楽しめる

開発調査を含めればJICAの協力は約4年がたつ。サディコビッチさんは「JICAの継続的な支援に感謝している。経済状況は依